
つまらない・くだらない公園

おりんぴあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

つまらない・くだらない公園

【Nコード】

N5995D

【作者名】

おりんぴあ

【あらすじ】

ある事故で足が不自由になった主人公・美幸は隣の病室の不思議な少女と出会う。

「つまらない。くだらない」

病室の窓から、外の風景を見下ろしている少女が呟いた。

どうやら、『つまらない・くだらない』はその少女の口癖らしい。

あんな事故さえ無かったら……

少女は九日前の事故のことを思い出した。

突然の出来事だった。いつもと同じ道で同じ友人と……何の変哲の無いオレンジ色の夕暮れの中、家へ帰宅していた。友人と交差点で別れたときだった。すごいスピードで飛ばしまくるバイクと接触した。

「お母さん。私、もう一人でできるから……誠も待ってるし、今日は家に帰っていいよ」

ベットで座っている少女は病室の時計がもう五時半になってしまった事に気付き、母に告げた。

「誠は叔父さんがいるから大丈夫よ。そうそう美幸、林檎食べる？」
母親は鞆から林檎の入ったタッパーを出して言った。

「……もう！ お母さん！ 私の事なんかもういいから！ まだ誠は5歳なんだからね！」

美幸と呼ばれた少女が怒鳴った。

病室が静かになる。

母親は困ったような顔したまま「じゃあね」と言って出て行った。ドアを閉まる音が部屋中に響いた。

すると急に、美幸の心にチクチクと悲しさと虚しさが、めり込んできた。

「ごめんね。お母さん……私、弱くて。きつく当たってごめんね。」

本当は誠、しっかり者だから大丈夫だよ。私、悲しかったんだ。もうテニスが出来ないって……もう歩けないかもしれないって……。美幸の頬に涙が一粒伝わって、唇まで流れた。そして自分の足をなでた。

つまらない。くだらないよ……こんなの

朝、目が覚めると見知らぬ少女が美幸の病室にいた。

「……どちらさまですか？」

寝起きの美幸は恐るおそる訊ねた。

少女の顔は整っていて、唇はサクランボの様に赤い。そして瞳はとても綺麗に光っていた。少女はしばらくボーっと一点を見つめていた。そして

「おはよう！ 美幸ちゃん。えっと……私はね、百合って言っんだよ。この病室の隣にいるの。」

と突然、百合と名乗った少女が微笑して言った。

知らない少女に自己紹介をされて美幸は戸惑った。しかし、ここで沈黙をつくると気まづくなりそうと思い、美幸はあいさつをした。

「ねえ、美幸ちゃん！ お外行こうよ！」

いきなり百合は提案をした。

ノンキな子。なんだかムカつく……

「ねえ、いいでしょ？ 行こうよ！ 美幸ちゃん」

百合はおねだりをした。

……まあ、退屈だし。一回だけなら行ってあげるか……

美幸は「いいよ」と言っ、看護婦さんに車椅子を出してもらった。

「どこに行くつもり？」

美幸は訊ねた。

「この病院のすぐ横の公園！」

百合はうれしそうに言い「じゃあ準備してくるから、1階のロビーで待ってて」と言い残してどこかへ行ってしまった。

あの『つまらなくて、くだらない公園』か。……そう言えば、百合ちゃんはある元気なのはどうして病院で入院してるんだろ……

公園には中年の看護婦さんも一緒にいて来た。

「今日は日差しがポカポカだね～。きつといい天気なのかなあ？」
と百合は伸びをして言った。看護婦さんはニコニコ笑ってベンチに腰をおろした。

「あ、花だ」

美幸はぼつりと呟いた。

「え？ お花？ すつごーい！ きつとタンポポさんだよね」
百合は言った。

さつきから……なんなんだろう？ 変な感じ……

美幸は百合の言動に違和感を感じた。

「ねえ、美幸ちゃん。このお花、本当は何のお花なの？」
百合が訊ねた。美幸はびっくりした。そして

「さつきから……どうしたの？ おかしいよ」
と言ってしまった。もうちよつと言葉を選べばよかった……と美幸は後悔したが遅かった。百合は悲しそうに呟いた。

「おかしくないよ……だって私……」

百合は途中まで言っただけでしばらく沈黙が続いた。そして言った。

「……目、見えないんだもん」

……え？

美幸は驚いた。

見えて……いないの？ ……この子は……この綺麗に

光った瞳には何も映っていないの……信じられない……

反応に困った美幸に気付いた看護婦さんは

「もう帰りましょうか」

と話を切り上げようとした。しかし

「待って。ねえ美幸ちゃん！ もっと教えて！ どんな形でどんな色をしている花なのか知りたいの！」

百合は必死になった。

「私は目が見えない。だけど普通の人よりね、耳がいいの。遠くの鳥の鳴き声とか、風の音とか聞こえるんだよ！」

そう言つと、百合はニコッと微笑んだ。

百合の笑顔はとても生き生きしていた。

つられて美幸も百合に微笑んだ。

「あ、今。美幸ちゃん笑った？」

百合はクスクスと笑いながら言った。

美幸は、いつのまにか『つまらい・くだらない公園』がとても新鮮な場所に思えていた。

（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。
よかったら感想をお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5995d/>

つまらない・くだらない公園

2010年11月25日17時53分発行